

【研究ノート】

## 満州国立中央博物館の展覧会

Exhibition of Manchukuo national museum

森泉 海\*

Kai MORIIZUMI

### はじめに

満州国立中央博物館(以下国立中央博物館)<sup>(1)</sup>の副館長である藤山一雄は、展覧会の意義について、「展覧会の開催の如きまた今日の如く庁舎を有せざる時代に於ては効果あり、変化ある資料展示の一方法である。これは機会を捉へ、時に先行し、並行し、乃至追隨して開會することは人心を刺激し、啓蒙する」とし<sup>(2)</sup>、常設展とは異なる展示を行うことで、来館者に、新たな驚きと発見を与えることを期し、国立中央博物館でも、当時の時局や社会情勢を反映した展覧会が開催されている<sup>(3)</sup>。

ここでは国立中央博物館において、1939年に開催されたシベリア展覧会に注目し、当時の社会情勢の中で、開催に至った経緯や目的、展示に関する特徴を明らかにするとともに、後に開館式が行われた国立中央博物館大経路展示場、民俗展示場の展示計画との関連性も指摘したい。また、紀元2600年記念事業の一環として開催された、飛鳥奈良朝文化展覧会(紀元二千六百年慶祝飛鳥奈良朝文化展覧会)にも触れ、今後、国立中央博物館はじめ、当時の日本国内含む、博物館活動の1つとして開催された「展覧会」が果たした役割を研究・考察していく上での序論とする。

### 1. シベリア展覧会

#### 1-1. 展覧会の開催

1939年7月1日から5日まで、新京の中央に位置する大同大街の三中井百貨店においてシベリア展覧会が開催された<sup>(4)</sup>。この展覧会は、満ソ国境付近の緊迫した情勢を受けて、「北辺に対する興味研究の必要と、国防の急を警告するため」<sup>(5)</sup>「真のシベリヤ<sup>(7)</sup>の姿を少しでもよく認識する」<sup>(6)</sup>のために開催されたもので、その趣意は、

もともとアジア人のものであつたシベリアである。3200 軒の長い距離に亘つて、我が満州国の全国境に接するシベリアである。その全国境において怖るべき軍備を以て我が満州国の全国

\* 國學院大學大学院

---

境に侵略的大展開を敢行しやうと、加速度的な武装補強に日も維足らず一触即発の危機を醗醸しつゝあるシベリアである。否現に幹岔子事件や張鼓峰事件を又最近はノモンハン事件をおこしてゐるシベリアである。よかれ悪かれこれ程の因縁深いシベリアでありながら、国民の大部分は、その隣に枕を高うしてその真相を碌々知らない上に少しも知ろうとしないで平気で居ることを考へると、我々は戦慄に近いものを感じる。敢てシベリア展覧会を計画した所以である<sup>(7)</sup>。

とされ、国立中央博物館、日満文化協会が主催、関東軍、國務院弘報処、協和会、満州新聞社の後援により開催されたものである。

この展覧会の開催される前々年6月に幹岔子島事件、前年7月には張鼓峰事件、そしてこの年の5月のノモンハン事件（展覧会開催当時も戦闘中）等、満ソ国境付近でのソ連軍との国境紛争がたびたび発生していた。また一方で、1937年7月の盧溝橋事件に始まる日中戦争<sup>(8)</sup>といった緊迫した状況が続いていた。

「最近の満ソ国境方面の雲行は頗る慌しきものあり、何人が見るも嵐の前夜たるを思はしむるに充分である。此の時に当り吾人の最も意を至すべきは真のシベリヤの姿を少しでもよく認識する事である」<sup>(9)</sup>、前掲の趣意にある、「その全国境において怖るべき軍備を以て我が満州国の全国境に侵略的大展開を敢行しやうと、加速度的な武装補強に日も維足らず一触即発の危機を醗醸しつゝあるシベリアである。否現に幹岔子事件や張鼓峰事件を又最近はノモンハン事件をおこしてゐるシベリアである」といった記述からも、非常に緊迫した社会情勢であり、それが展覧会開催の背景となっていたことがわかる。

こうした中で開催に至ったシベリア展覧会であるが、主催は、国立中央博物館と日満文化協会であった。日満文化協会は、その名の通り、日本と満州の関係を文化面から交流、その振興を図るという組織で、国立中央博物館に限らず多数の展覧会の開催に関与している。後援は、関東軍、國務院弘報処、協和会、満州新聞社であるが、弘報処は満州国の行政組織、宣撫工作を担う情報統制機関であり、協和会も同様に宣撫工作に関わる思想教化団体であった。満州新聞社は関東軍の機関紙的な役割を果たしている新聞社といわれ<sup>(10)</sup>、他の展覧会や博覧会などのイベントにも積極的に協力している。これら主催・後援団体を見るだけでも、展覧会に込められた政治的、軍事的といった意図を読み取ることが出来るだろう。

一方で、趣意では、緊迫した状況にありながら無関心な国民が多いことを批判し、国防の急を警告すると同時に、満州国の国策<sup>(11)</sup>の1つであった北辺振興に関連して、そちらへの興味関心を持たせるためという目的も指摘できる。

さらに、この展覧会開催期間中の7月5日は「興亜記念日」、7日は2回目の「支那事変記念日」であったことも考慮すると、展示資料は直接的には関係ないものの、日中戦に対しても、更に国民意識を高めるといった役割も期待されていたことも考えられる。展覧会に際して藤山が著し、解説書という形で発行された、『新しくシベリアを観る』<sup>(12)</sup>においても、「支那事変は表面日本と蒋介石との戦争であるが、裏面は英仏ソとの第三国相手の戦争である。蔣を亡すには三国中でも

先づソ連を討たなければならぬ。」といった記述や、共産主義の脅威を論じるといった部分も見られることから、展覧会に含まれた政治的・軍事的意図も読み取ることが可能である<sup>(13)</sup>。

また、展覧会に際し刊行された出版物も、展示資料と同様、無関心であった国民への知識の涵養を果たす役割を担っていたといえる<sup>(14)</sup>。

## 1-2. 展示

主な展示品は<sup>(15)</sup>、

国境地帯の各種写真類、軍艦模型 約40点

シベリア原住民の解説図 約20点（風貌・生活の解説図）

シベリア移住スラブ人の生活を示すもの 約10点

シベリアの都市及自然の写真類 約20点（ジオラマ、剥製、骨格標本）

シベリアの動物 約20点

シベリアの工芸品類 約40点

シベリア産地質鉱物標本類 約20点

各種図表・地図類 約10点

シベリアに関する文献類 約20点

で構成されており、シベリアにおける生物、鉱工業、政治、外交、行政、軍備その他一切の自然、人文方面の経済的環境を一望することが可能で、会場を一巡すれば当時のシベリアの現状が十分理解出来るような内容になっていた<sup>(16)</sup>。

「国境地帯の各種写真類、軍艦模型」は、国境付近の様子、国境警備の兵士、またはソ連軍警備艇写真、ノモンハン事件関連写真、軍艦陸奥をはじめとした模型といった資料が展示されており、国民に国境付近での現況を知らせる役割を果たす軍事的意味合いをもった資料群であったといえる。また、以下のシベリア関係資料に関しては後に触れるが、国策である北辺振興に関係するような政治的意味合いも含み持った展示となっていた。

そして、「俄然市民の視聴を集め、開会以来毎日観衆引きもきらず、星野長官<sup>(17)</sup>をはじめ名士の顔もみえ入場者二万五千名を突破する盛況」で、『面白読本』や「シベリア漫画地図」の複製縮図も即売し、「最近新京で開かれた各種展覧会中最も成功したもの」<sup>(18)</sup>であり、藤山の言う、「機会を捉へ、時に先行し、並行し、乃至追隨して開会することは人心を刺激し、啓蒙する」という展覧会の意義に対して、「頗る効果的」<sup>(19)</sup>であったと述べている。

## 1-3. 大経路展示場、民俗展示場計画の関連性の指摘

満州国立中央博物館は、自然科学部門の新京・大経路展示場と、人文部門である奉天分館で構成され、1938年12月公布の「国立博物館官制」においてその社会教育施設としての役割が定められたが、大経路展示場は、1939年7月のシベリア展覧会時点では、博物館の建物、展示室が無い状態であり、翌1940年7月15日に開館式を行った<sup>(20)</sup>。

自然科学資料を扱う大経路展示場展示室は、動物・地理・鉱物・地質・物理の5部門に分類されていたが、今回注目すべきは「第二室地理部」の展示である。地理部展示室は、満州の地理に

関する資料、「満州地貌模型」「皇輿全覽図原版型」の他、「原始民俗品」「白露エミгранトの丸太小屋断面図模型」が展示されていた。後者2つの詳細は、オロチョン・ゴルチ・蒙古・白露エミгранト等先住民族の工芸品と、革製の寝具、長靴、帽子、手袋、といった、防寒生活用具が中心であった<sup>(21)</sup>。そして、地理部展示室に対する解説には<sup>(22)</sup>、「その寒さに対する衣食住の装置、用意について殊に島国的日本人は大いに学ぶ必要がある」ということが述べられている。

さらに、民俗展示場計画へ目を向ける。民俗展示場は、1940年8月より建設が開始されたもので、新京市の南湖湖畔に約10万坪の森林公園を造成し、その内部に先住民族をはじめとして、漢民族や日本人を含む、各民族の生活様式や風習をありのままの形で再現する野外博物館であり、スカンセンをモデルとしていた。シベリアや満州の北方地域に暮らす先住諸民族の生活を如実に展示し<sup>(23)</sup>、失われていく古俗習慣の保存維持、そして、渡満してきた日本人が寒冷地の気候や自然に順応し、生活水準を高めるために役立てようとして期待されたものであった<sup>(24)</sup>。(大経路展示場での展示や、民俗展示場計画に関する一連の研究は、犬塚氏、大出氏の先行研究に詳しい。)

藤山は、副館長就任以前から、満州へ移住してくる日本人が、建物や衣類に関しても、本土での生活形態に固執しているために、不合理、不便な生活を行っている、また、政府も対策をとらないということ多数の論文や著作で批判し、寒冷地での生活を日本人に示すといった場の必要性を説いていた。そして、副館長就任により、理論を実践する場を得、大経路展示場地理展示室、民俗展示場での先住民族の展示という形で実践され、これらの展示意図が、「日本人は、先住民の寒冷地での生活様式を展示により学ぶべき」ということであったことは、各氏の先行研究で明らかにされている通りである。

シベリア展覧会での「シベリア原住民の解説図」「シベリア移住スラブ人の生活を示すもの」に関する展示、その具体的な資料内容は、前者が「ツングース・オロチョン・ギリヤード・チユクチ・アルタイ・ゴリド・コリヤーク・ヤクート・ブリヤード・タタール等各種のアジア原住民の風貌・生活等を偲ぶもの」、後者は「チオラマ・シベリヤ移住スラブ人の家を始め寺院村落狩具等の解説図・写真等」<sup>(25)</sup>である。これら展覧会に出品された先住民族に関する資料が、大経路展示場での展示資料とどの程度共通または一致しているかは定かではないものの、展覧会においても先住民関連の展示がなされていたという事実からは、藤山の意向を窺うことが出来るのではないだろうか。

#### 1-4. まとめ

国策に絡めたシベリアの重要性や、ソ連の脅威、国防意識の喚起、国民の戦意高揚を期待され、政治的・軍事的な意図が強かったシベリア展覧会の中で、シベリアの「先住民族の生活」にまで踏み込んだ展示が見られたというのは注目すべきことである。この展覧会は、藤山がそれまでに主張してきた理論を、はじめて展示という形で示すことができた場であり、また、大経路展示場間館前の展覧会での入場者の反応を、後の大経路展示場、民俗展示場の展示構成の参考にするといった考察に発展させることも可能となるであろう。

以上、国立中央博物館において開催された、シベリア展覧会についての考察を行ったが、後に

---

未見であった資料や、論文、著作、手記等の発見により新たな論が展開される可能性があることを併せて付記しておく<sup>(26)</sup>。

そして、今後、研究を進める上での序論として、シベリア展覧会の翌年、紀元 2600 年記念事業の 1 つとして開催された、飛鳥奈良朝展覧会を紹介し、考察を加えたい。

## 2. 飛鳥奈良朝文化展覧会

### 2-1. 紀元 2600 年記念事業

1940 年は、『日本書紀』の記述に基づく、神武天皇の橿原における即位から 2600 年目とされ、日本国内各地で「皇紀 2600 年」「紀元 2600 年」を記念した奉祝記念行事や、事業が数多く計画、実施された。記念行事には内外地合わせてのべ約 5 千万人が動員され、記念事業は約 1 万 500 件を数え、要した金額は 1 億 6,300 万円超であったといわれる<sup>(27)</sup>。

博物館の建設や展覧会の開催もこれら記念事業の一環として行われているが、その主な事業計画は、万国博覧会の開催、同博覧会の跡地を利用した中央科学博物館の設置、国立自然博物館の成立、音楽博物館の設立、映画博物館の設立、実業博物館の設立、国史館の設立、近代美術館の設立、各地へ博物館の設立を奨励すること等が挙げられる。しかし、万博をはじめ、多くの計画は、戦争の拡大や大不況、物資統制が重なり、実現されることなく終わった。

1937 年の日中開戦後、挙国一致・尽忠報国・堅忍持久、国民精神総動員が叫ばれる中、記念事業に便乗した形で、戦時下における天然資源の調査研究、開発利用に資するための施設である科学博物館や自然博物館の建設が急がれた。また、「音楽はその国の文化を象徴するものであり、且国民志操の涵養に関して偉大なる関係を有する事は古来識者によつて喝破されている所で、之が健全なる進展を期すべきは今更喋喋を要しない次第である。翻つて顧るに我が国が世界に示し得る輝かしき文化施設の中にあつて、最も甚だしき欠陥は音楽社会教育の施設、音楽研究機関としての音楽博物館、若しくはそれに類する設備の皆無なる事実である」<sup>(28)</sup>として音楽博物館が、1939 年 4 月の「本法ハ国民文化ノ進展ニ資スル為ノ映画ノ質的向上ヲ促シ映画事業ノ健全ナル発達ヲ図ルコトヲ目的トス」として公布された映画法を受けた形での映画博物館、また、渋沢栄一関係資料を中心に、明治以来日本の商工業発展の歴史を展示する目的の実業博物館、そして歴史博物館として国史館の設立計画がその主な内容であった。

また、「紀元 2600 年」を記念した展覧会も多く開催され、東京帝室博物館における正倉院御物特別展覧会をはじめ、書道、神社宝物、日本歴史、技術、美術、日本画、通信、交通、衛生、日本民族海外発展等様々な分野にわたっていた。百貨店の展示スペースを会場としたものも多く、文部省の施策により、学校行事の一環として、児童の図画・書道等の作品を展示する展覧会も見られた。

### 2-2. 飛鳥奈良朝文化展覧会の開催

満州においても、日本と同様、「紀元 2600 年」に関する記念事業が日満文化協会を中心として計画・実施されていた。「康徳 7 年度事業報告」<sup>(29)</sup>には、「本年度は日本紀元二千六百年に当たる

を以て本会は本年の事業中心を此処に置き、飛鳥奈良文化展覧会、慶祝日本二千六百年史講座、日本紀元二千六百年記念放送、各民族語別『日本史』の刊行、第三回満州国美術展覧会、陸軍美術展覧会、興亜書道展覧会、日本彫刻展覧会、撫順古蹟調査、通溝出版、遼陽古蹟調査、満蒙史論叢出版、東方国民文庫の継続出版、講演及放送、文学、演劇、映画、建国十周年記念事業、満系青少年読書状況の調査、国民音楽教化対策の事業を遂行、完了したとある。

これらは、同年2月14日より50回にわたり毎週日曜日午前10時から30分間、日本と大陸との交易関係や歴史、日本の神道・仏教から、政治史、法制史、行政史、外交史、文化史、さらには武士道、婦女、家庭についてまでを対象にした日本史講座を、「満語」によりラジオで放送し、「各方面ノ満系知識層ヲ指導之ニ当タラシメ日本知識ヲ深カラシメ」<sup>(30)</sup>のために実施された。また、「慶祝日本二千六百年史講座」「日本紀元二千六百年記念放送」、日本の歴史を200ページ程度で解説し、更に満・鮮・蒙・露文に翻訳した日本歴史書、『日本文化史』『日本二千六百年』『光輝日本』の刊行等がこれら記念事業の具体的内容であった<sup>(31)</sup>。

前掲のように、こうした事業の一環として、主催・国立中央博物館、日満文化協会、後援・日本紀元二千六百年満州帝国慶祝委員会により、1940年4月25日から5月2日までの8日間、新京敷島高等女学校の体育館において開催されたものが、紀元二千六百年慶祝飛鳥奈良朝文化展覧会である。その開催趣意は、

日本と大陸の支通は遠く上古にあるが、其の文化的交渉の最も頻繁にして華やかであつたのは、1300年より1200百年前にかけての飛鳥奈良時代、之を中国で言へば随唐の時代、満州では高句麗の末期から渤海の盛な時代である。此の時代の東亜民族は渾然と一つとなつて、光輝ある東方文化の建設に従事した。印度及びイランから砂漠を越え海洋を渡つて東方の大陸に蒐つた文化は、新に伝統的な中国を刺激し融合して、其の清華は更に転じ日本に入つて一大結実を見たのである。現実には過去の展開である。我々東方諸民族は今日東亜の建設に当つて、我等の祖宗の偉業を顧みる時、切々たる欣慕に堪へないものがある。茲に日本紀元二千六百年の盛世を祝し、併せて我等諸民族先哲の建設したる東方文化の真髓の違芳を宣揚せんとして、茲に飛鳥奈良の文化展覧会を開催した次第である。<sup>(32)</sup>

とされており、日本と大陸との文化交流を示す資料がいかに日本に保存されているかを知らしめる<sup>(33)</sup>と同時に、日本古代文化の清華である飛鳥・奈良時代の文化様相を満州国に紹介し、日本の伝統を通じて日満文化の交流を図るといったことが期待され、当時の建築、彫刻、工芸、美術、染織、書跡等の「東亜諸民族の渾然として一となりし当時の文化の片影」<sup>(34)</sup>を顕す資料を、帝室博物館、東京帝国大学、京都帝国大学、東京美術学校、法隆寺、東大寺、薬師寺その他機関から借用、模型、模写、写真とともに展示した。

国宝や重要美術品の海外への持ち出しが制限されていたために実物資料は少なかったが、“世界最古の木造建築物”である法隆寺<sup>(35)</sup>の写真による解説、金堂壁画の模写、夢殿観音の写真、玉

---

虫厨子の模型をはじめ、正倉院御物の書跡、薬師寺日光菩薩の模造、東大寺大仏写真等が展示されていた<sup>(36)</sup>。

なお、同年5月、上野の東京府美術館で開催された、「紀元二千六百年記念日本文化史展覧会」において展示された飛鳥・奈良時代の資料は、法隆寺、薬師寺、東大寺所蔵品が中心で、吉祥天像（国宝・薬師寺蔵）や如意観音像（国宝・東大寺蔵）の他、東京美術学校製作による各寺院の金堂・五重塔等の模型や、厨子の模造品、伽藍配置の写真が展示されていたことから<sup>(37)</sup>国立中央博物館での展示も同様の手法が採られていたのではないかと考えられる。

飛鳥奈良朝文化展覧会の入場者は約5万人の盛況であり<sup>(38)</sup>、絢爛な日本文化の華に驚嘆し、熱心な観賞ぶりを見せたほか、「満州人」の姿も多数見られたことから、文字通り、日本古代文化を通じて日滿交歓が行われた展覧会であったという<sup>(39)</sup>。

また、建国大学教授であった大森志朗は、展覧会に関し、「一千三百のむかしに大和地方に花と咲き競った文化が正倉院御物、法隆寺、東大寺の遺構遺品を中心として、これだけ纏まって、満州において陳列されたといふことは主催者の労を多としなければならない」との評価をしている<sup>(40)</sup>。

この展覧会の趣意と、藤山の、「日本美術と建国精神鼓吹のため」<sup>(41)</sup>といった記述からも分かる通り、日本と中国大陸との交流の歴史を理解させ、日本文化の源流は中国大陸からの影響も受けているということを明示し、「我が社会教育の目的とするところは国民の文化と福利を増進するにありて、先ず克く建国の意義を明にし、王道精神の涵養を計り、民族の融和と同胞愛を高調し」<sup>(42)</sup>といった、「日滿一体」「五族協和」の理想に資するという目的が含まれていたと考えて良いだろう。

### 3. おわりに

以上、満州国立中央博物館の博物館活動として行われた展覧会について述べてきた。シベリア展覧会は、当時の緊迫した社会情勢を背景として、その現況を国民に示す場として開催され、政治的・軍事的意味合いの強いものであった。一方で飛鳥奈良朝文化展覧会は、「紀元2600年」記念事業の一環として行われたもので、政治的な意味合いも当然指摘できるものの、中国大陸との交流により形成された日本の文化を満州に紹介するという内容であったとともに、両展覧会いずれも副館長藤山一雄の主張する理念が反映された展示内容となっていた。展覧会を「訪れた」「教育を受けた」側（満州在住の日本人、中国人ともに）の資料が少なく、一概に断定はできないものの、国立中央博物館における展覧会自体も、「機会を捉へ、時に先行し、並行し、乃至追隨して開会することは人心を刺激し、啓蒙する」という主張を実践したものであり、社会情勢や民俗、文化、歴史を伝えるのに、非常に効果的な博物館活動であったと考えてよい。

今後の展望であるが、国立中央博物館は勿論、同時期の日本本土で開催された同様の意図を持ったと見られる展覧会にも目を向け、更なる比較、検討を加えることで新たな論を展開していきたい。

---

## 註

- (1) 満州（国）国立博物館に関する先行研究は、犬塚康博氏、大出尚子氏によりその大半がなされている。（主な文献は参考文献欄に掲載）
- (2) 藤山一雄 1940『新博物館態勢』満日文化協会
- (3) 三宅俊成が分館長を務めた奉天分館とは別に扱う。
- (4) 会場となった三中井百貨店の定休日を1日挟むため、開催日数は4日間である。
- (5) 国立中央博物館 1939「シベリア展覧会」『国立中央博物館時報』1 国立中央博物館
- (6) 藤山一雄 1939「満州国立中央博物館の近況」『博物館研究』12-8 日本博物館協会
- (7) 国立中央博物館 1939「シベリア展覧会の趣意」『国立中央博物館時報』1 国立中央博物館
- (8) 盧溝橋事件が発端となり、宣戦布告がなされていないため、「日華事変」「支那事変」等の呼称も用いられている。
- (9) 前掲(6)
- (10) 李相哲 2000『満州における日本人経営新聞の歴史』凱風社。（当時の『満州新聞』紙面でも、展覧会の紹介記事や広告が多数見られる）
- (11) 産業開発五ヶ年計画、北辺振興、開拓事業
- (12) 藤山一雄 1939『新しくシベリアを観る』東方国民文庫
- (13) 1939年6月27日『満州新聞』『新しくシベリアを観る』を読む』において、「結局著者はシベリアはアジアだと感激して“アジアの愛の世界”を導かうといふ浪漫的感情に走る其浪漫がいかに深く、時々顔を出す科学がいかに精微なものであるかどうかは知らない、可なりな点まで客観的でありながら不意に浪漫主義も現れるこの混淆物がシベリアへの関心を刺激すれば幸だと著者は断つてゐるが、全くその通りである」との評がなされている。
- (14) ソ連の脅威や、北辺振興の重要性を口語体の文章で分かりやすく解説した『シベリア記念展面白読本』や、「シベリア漫画地図」の複製縮図も刊行された。
- (15) 「主たる出版物」（『国立中央博物館時報』1 国立中央博物館）、「シベリア展覧会出品目録」より。
- (16) 前掲(6)
- (17) 満州国総務長官であった星野直樹。藤山の大学の後輩でもあり親交があった。
- (18) 「シベリア展覧会」『国立中央博物館時報』1 国立中央博物館（1938年9月の「北支蒙疆全貌展覧会」、1939年5月の「紀元2600年奉賛書道展」のほか、小学校児童の作品展や書道展も多く開催されていた。）
- (19) 前掲(2)
- (20) 開館式が行われるまでの間は、博物館の夕、科学ハイキング、講演会、公開講座といった、「博物館エクステンション」と呼ばれる博物館活動を行っていた。
- (21) 国立中央博物館 1940『国立中央博物館大経路展示場第1次列品目録』国立中央博物館
- (22) 前掲(21)



- 
- (23) 藤山一雄 1944「満州国立中央博物館態勢」『博物館研究』17-4 日本博物館協会
- (24) 藤山一雄 1942「生ける国立中央博物館」『満州グラフ』10-5 満鉄会
- (25) 生活用具や工芸品類が大多数、または住居や建築物のジオラマが多く展示されていた。
- (26) 先行研究では言及されていないが、1943年1月に刊行された、『協和運動』(5巻1号)内、藤山の執筆した論文「民族の移動について」において、「指導者としての日本民族」、「原住地にそのまゝ固定せるツングース民族とは専<sup>(ママ)</sup>しき差異ある優秀民族として改めて指導者の位置に立ち大陸民にその奮起を促し初めた」といった表現が見られ、帝国主義を嫌悪していたとされる藤山の思想面に関しても、さらなる検討が必要と考えられる。
- (27) 古川隆久 1994「紀二千六百年奉祝記念事業をめぐる政治過程」『史学雑誌』10-9 史学会
- (28) 田辺尚雄 1939「音楽博物館設立の趣意」『自然科学と博物館』10-117 東京科学博物館
- (29) 日本図書センター編 2000『満州年鑑』7(底本『満州年鑑 昭和16年度版』) 日本図書センター
- (30) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016056700 「紀元二千六百年奉祝事業ニ関スル件」 外務省外交史料館
- (31) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016056800 「満日文化協会紀要並職員表送付 昭和十五年五月」 外務省外交史料館
- (32) 1940「日本紀元二千六百年慶祝飛鳥奈良朝文化展覧会」『国立中央博物館時報』5 国立中央博物館
- (33) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016056700 「紀元二千六百年奉祝事業ニ関スル件」 外務省外交史料館
- (34) 遠藤隆次 1940「満州国国立博物館の近況」『博物館研究』13-11 日本博物館協会
- (35) 藤山一雄は、1940年4月30日の『満州新聞』に寄せた小論「飛鳥奈良文化展の暗示するもの」の中で、飛鳥、奈良、白鳳、天平文化に関し、「それら文化創造者の元締」であるとして聖徳太子の偉業を讃えている。「太子の文化に対する積極的能動的態度は実に世界文化史の淵叢ともいふべき燦然たる飛鳥奈良朝文化促進大成の主因となった」「太子こそ実に博物館的存在」であるとして、「宗教を根底とせざる政治には形はあつても真の統制は実現しない。政治の宗教的色彩が濃くなり、初めて真の文化が生れる。物質主義や機械主義の国家生活には一時的の「文明」は点滅するが文化の花は咲かない。此の文化の花は物が咲かすのではなくて真実の人のみが咲かすのであると知れ。満州国はいま少し聖徳太子への追慕を必要とする。」との論を展開しており、それらの主張が、“世界最古の建築物”である法隆寺に関連した展示によって表されたと考えられる。藤山の聖徳太子観や、当時の文化に対する見方等更なる検討は不可欠であるが、この飛鳥奈良朝文化展覧会に関しても、シベリア展覧会同様、藤山の理論が強く反映された内容であったといえる。
- (36) 新京日日新聞 1940年4月26日朝刊「古典日本の粹 飛鳥奈良文化展開く」
- (37) 東京朝日新聞社編 1940『日本文化史展覧会目録』 東京朝日新聞社

- 
- (38) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016056700 「紀元二千六百年奉祝事業ニ関スル件」  
外務省外交史料館
- (39) 前掲(37) 駐満ドイツ公使の来場を示す写真あり
- (40) 満州新聞 1940年4月28日朝刊「飛鳥奈良文化展を見る(一)」
- (41) 藤山一雄 1944「満州国立中央博物館態勢」『博物館研究』17-4 日本博物館協会
- (42) 「満州国」教育史研究会編 1993『「満州国」教育資料集成』11 エムティ出版(文教部 1932  
『大同元年 礼教事業概要』収録)

## 参考文献

### <著作>

- 伊藤寿郎 1990『博物館基本文献集 第4巻』大空社
- 伊藤寿郎 1990『博物館基本文献集 教育的観覧施設一覽』大空社
- 椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣
- 椎名仙卓 2000『図解博物館史』雄山閣
- 青木豊 2003『博物館展示の研究』雄山閣
- 金子淳 2001『博物館の政治学』青弓社
- 塚瀬進 2004『満州の日本人』吉川弘文館
- 遠藤隆次 1965『原人発掘 一古生物学者の満州25年』春秋社
- 野村章 1995『「満州・満州国」教育研究序説』エムティ出版

### <論文>

- 犬塚康博 2004「屹立する異貌の博物館 満州国国立中央博物館」『満州とは何だったのか』藤原書店
- 犬塚康博 1993「満州国国立中央博物館とその教育活動」『名古屋市博物館研究紀要』16 名古屋市博物館
- 犬塚康博 1994「藤山一雄と満州国の民俗博物館」『名古屋市博物館研究紀要』17 名古屋市博物館
- 犬塚康博 1994「新京の博物館」『「満州国」教育史研究』2 東海大学出版会
- 犬塚康博 1995「満州国国立中央博物館の展示活動—新京本館大経路展示場の場合—」『関西大学博物館研究紀要』創刊号 関西大学博物館
- 大出尚子 2004『「満州国」国立中央博物館と『満州国』の建国理念—副館長藤山一雄の『民族協和』構想—』『社会文化史学』46 社会文化史学会
- 大出尚子 2007『「満州国」の博物館建設—国立博物館の成立過程と収藏品—』『史境』55 歴史人類学会
- 大出尚子 2007「藤山一雄の民俗展示場構想と満州開拓政策」『文化資源学』6 文化資源学会
- 原山煌 1980『「満州国」国立中央博物館の諸活動(一) 定期刊行物について』『四天王寺女子大学紀要』13 四天王寺女子大学

- 
- 原山煌 1981 『『満州国』国立中央博物館の諸活動（二）』『IBU 四天王寺国際仏教大学文学紀要』  
14 四天王寺国際仏教大学文学
- 相庭和彦 1999 「日中戦争期の植民地における社会教育に関する一考察 『満州国』の社会教育施設を中心として」『新潟大学教育人間科学部紀要』1-2 新潟大学教育学部
- 君塚仁彦 2001 『『満州国』社会教育政策と博物館に関する考察(1)『初期文教部期』を中心として』  
『東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学』52 東京学芸大学
- 君塚仁彦 2003 『『満州国』社会教育政策と博物館に関する考察(2)奉天省を中心として』『東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学』五四 東京学芸大学
- 槻木瑞生 1995 「満州国の教育」『新博物館態勢満州国の博物館が戦後日本に伝えていること』名古屋  
市博物館
- 岡村敬二 1999 「日満文化協会—その設立までの道のり」『京都文化短期大学紀要』30 京都文化短期  
大学
- 岡村敬二 2000 「日満文化協会—創立直後の活動を中心に」『京都文化短期大学紀要』31・32 合併  
号 京都文化短期大学
- 岡村敬二 2001 「日満文化協会にみる『満州国』の文化活動—昭和 12 年の『転機』から昭和 16  
年『芸文要綱』まで」『人間文化研究』7 京都学園大学人間文化学会
- 岡村敬二 2001 「羅振玉と日満文化協会—人事問題をめぐって」『人間文化研究』5 京都学園大学  
人間文化学会
- 上原真人 2006 「遼寧省博物館にて」『遼文化・遼寧省調査報告書：京都大学大学院文学研究科 21  
世紀COEプログラム—「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」』京都大学大学院
- <その他>
- 『国立中央博物館時報』各号 国立中央博物館
- 『満州国立中央博物館論叢』各号 国立中央博物館
- 『博物館研究』各号 日本博物館協会
- 『博物館史研究』各号 博物館史研究会
- 紀元二千六百年奉祝会 1939 『紀元二千六百年』5月号 紀元二千六百年奉祝会
- 紀元二千六百年奉祝会 1939 『紀元二千六百年』6月号 紀元二千六百年奉祝会
- 国務院文教部 1992 『満州帝国文教年鑑』(第1次~4次収録)エムティ出版
- 満州国史編纂刊行会編 1971 『満州国史』総論・各論 満蒙同胞援護会
- 「満州国」教育史研究会 1993 『『満州・満州国』教育資料集成』第1巻 エムティ出版 (1932年  
「満州国教育方策」収録)
- 満州開発四十年史刊行会 1964 『満州開発四十年史』補巻 満史会
- 名古屋市博物館編 1995 『新博物館態勢 満州国の博物館が戦後日本に伝えていること』名古屋  
市博物館
- 野田光雄 1995 「回想」『新博物館態勢』名古屋市博物館

---

武藤直路 1995「五十年後の長春で」『新博物館態勢』名古屋市博物館  
毎日新聞社 1999『大日本帝国の戦争1 満州国の幻影 1931—1936』毎日新聞社  
西澤泰彦 2006『図説「満州」都市物語』河出書房